釜ヶ崎資料

創刊号

1986年2月23日発行：定価200円

目次

創刊にあたって ……1
なぜ釜ヶ崎は残されたか…小柳伸顕…2
はじめに／所名釜ヶ崎が消滅した日／今宮村の再出発／釜ヶ崎と名護（長町）／一八八八年の長町／長町の強制移住／大阪府の長町移住計画／細民地区としての釜ヶ崎／米騒動と釜ヶ崎／むすびにかえて
戦後の「釜ヶ崎」人口推移を中心に…家族もちから単身者の町へ 牛草英晴…13
一、戦後の所名変更と「あいりん地区」の呼称 二、「釜ヶ崎」の範囲
三、「釜ヶ崎」の人口の推移 四、「釜ヶ崎」社会の二重構造―監視される社会・差別される社会―

発行者：釜ヶ崎資料センター 代表 小柳伸顕
連絡所：大阪市西成区萩之茶屋3-9-24 共同住宅3-12

釜ヶ崎資料センター賛助会員募集

二年ほど前から釜ヶ崎の南部にある三角公園近くのアパートの一室に、ビラや本を集め、ほぼ毎週土曜日、集まりをもってきた。釜ヶ崎の資料はまだ未整理で不充分なものでしかないが、三年目をむかえるにあたって、広がりを求めることにした。

一、会費　一年間　五千円（『釜ヶ崎資料』購売料を含む。定例会への参加、資料センターの利用ができる。）

二、資料相談（実費負担）
　・問い合わせに応じ、釜ヶ崎に関する資料、レポートを送る。

三、釜ヶ崎に関する資料の提供を求め公開して行く。

創刊にあたって

釜ヶ崎は大阪市西成区の東北隅にあり、日本最大の簡易宿泊所街、二万人を超える日雇労働者が生きる街である。

一九七〇年十月に開設された「あいりん労働総合センター」の一階シャッターは午前五時に開くが、それよりも早く、四時から戸数人の車が周辺の路上に集まり始め、仕事を求める労働者を待ちうけている。

建設・土木工事、工場内作業などで働く釜ヶ崎の日雇労働者は、釜ヶ崎を拠点としながらも、全国に散在する違法の労務供給業者＝人夫出し・手配師・飯場を通じて、北は北海道から南は沖縄、時として海外にまで姿をあらわし、安価で流動性が高く、使い捨のきく労働力として経済の下層部分を支えている。

日雇労働者の置かれている立場の困難性を、もっとも端的にあらわすものが「アオカン」であり、官報に掲載されている「行旅死亡人公告」である。

アオカン・行旅死亡は、釜ヶ崎・日雇労働者の上におおい被さっている諸問題の集積の結果であり、また一般的な"人道上"の問題としても、世間の注目をあつめることが多く、社会の病理現象としてその対策が訴えられることが多い。

釜ヶ崎の諸問題の集積の結果であるから、アオカン、行旅死亡から問題点を逆照射し解明しようとすることは正しいが、個々の具体例、人生に充分とられれ、社会とのつながりをみる視点を確保しない限り、悲惨さのみを伝え、抽象的なヒューマニズムを説く例証の一つになるだけである。

"釜ヶ崎資料"は、釜ヶ崎解放への道筋を多様なものとしてたどりえるための、一つの素材となることをめざして創刊される。

この目的が実り豊かなものとなるために、読者からの資料相談を心から待ち望む。

（小柳伸顕・牛草英晴・本間啓一郎・久保利明）

なぜ「釜ケ崎」は残されたか

小柳伸顕

はじめに

町名釜ケ崎は、地図上にはない。何時、公に地図上から消滅したのだろうか。

一般には、「西成区史」（一九六八年）の記述が採用されているが、ここにも疑問符が打たれている（傍点引用者）。

釜ケ崎の名称については、明治三三年（一九〇〇年）四月一日の町名改称で『同字水渡・同水渡り・同水渡釜ケ崎・同釜ケ崎の反別弐町八反壱畝八歩を区域として水崎町』と改称するとあり、釜ケ崎の町名は、この時から公に消滅している。しかもこの水崎町は関西線以北であるから当時の南区であり、何故関西線以南の今宮村区域にこの釜ケ崎の俗称が残ったか、その理由は明らかではない。（三八ページ）

この小論の目的は、町名釜ケ崎が行政上消滅した日を設定するとともに「俗称が残った」理由を解明することにもある。

町名釜ケ崎が消滅した日

大阪府知事池松時和は、一九二二年（大一一）三月二三日「大阪府公報」（第九一九号）に大阪府告示第七五号として下記の告示を出した。

「西成郡今宮町左記大字小字ノ区域変更並其ノ名称改称ヲ為シ大正十一年四月一日ヨリ施行ノ件許可シタリ」

上記の告示の通り、大阪府の地図上から町名釜ケ崎が消滅したのは、告示が施行された一九二二年四月一日である。「西成区史」の記述よりも二二年後になる。

告示の内容が動かぬ証拠である。釜ケ崎関係のみを拾ってみる。

①西成郡今宮町大字今宮字釜ケ崎ノ内自七〇四―一～至七〇四―六・・・・

右区域ヲ変更シ今宮町甲岸ト改称ス

②西成郡今宮町大字今宮字釜ケ崎ノ内自六九―一～至六九―二・・・・

西成郡今宮町大字今宮字水渡ノ内自七二六―一・・・・

右区域ヲ変更シ今宮町東入船ト改称ス

③西成郡今宮町大字今宮字釜ケ崎ノ内自七〇六―二～至七〇六―七・・・・

西成郡今宮町大字今宮字水渡ノ内七二一―一、七二一―四・・・・

右区域ヲ変更シ今宮町西入船ト改称ス

告示のごとく、今宮町大字今宮字釜ケ崎は、字甲岸、字水渡、字東道、字八田とともに、甲岸、東入船、西入船と改称され、この時をもって、行政上消滅したことになる。

△今宮村の再出発

一八八九年（明二二）、大阪南部に、西成郡今宮村は一自治体として誕生する。釜ケ崎はその今宮村の一町名であった。一九一七年（大六）九月一日、今宮村は今宮町へ発展するが、今宮町の一町名として釜ケ崎が残されていたことは、既に見た通りである。

なぜ、「西成区史」のような誤解が起きたのか。

一八九七年（明三〇）、大阪市は第一次市域拡張を行った。その際、今宮村は二分され北部が南区に編入された。境界線は、難波村・柏原間（一八八九年五月開通）を走っていた大阪鉄道（現在の国鉄関西線）であり、今宮村の鉄道以北の地域は大阪市に編入され、南部は、西成郡今宮村として残った。今宮村は同じく鉄道で二分された木津村と合併し、今宮村大字元今宮と大字元木津として再出発した。二分されたのは、今宮村というより、今宮村字釜ケ崎、今宮村字水渡であり、鉄道以北は、南区字水渡、字釜ケ崎となり、一九〇〇年町名改称で南区水崎町となった。南部は、今宮村大字元今宮字水渡、同字釜ケ崎となり、一九二二年の町名改称まで釜ケ崎として残された。

「西成区史」の誤解は、今宮村字水渡、字釜ケ崎が鉄道以北にのみ存在したとの推定と一九二五年（大一四）、第二次大阪市域拡張の際、今宮町には、町名釜ケ崎を見出さなかったことに基くものと言えよう。

西成郡今宮村大字元今宮、同元木津は、一九一三年（大二）、今宮村大字今宮、同大字木津と改称され、一九一七年（大六）、今宮町になり、一九二五年（大一四）の第二次大阪市域拡張で西成区となり、大阪市に編入される。もっとも一九二四年（大一三）、今宮町から大阪府知事中川望に対する答申書の希望事項の中に「区役所を今宮町に設置し、区名を今宮とされたし」と一項があったが、実現しなかった。

大阪市への編入と同時に、今宮町時代の旧字名は、新町名に変えられ、今宮町甲岸は西成区甲岸町、同東入船は東入船町に、同西入船は西入船町に改称された。

今宮町の大阪市編入により、釜ケ崎は、甲岸町、東西入船町と呼ばれることになった。

△釜ケ崎と名称（長）町

今宮村は、海辺に面した小さい村であった。江戸時代から明治期にかけて残された字名がそれを物語る。水渡・釜ケ崎

西濱・高岸・海運・甲岸などをあげることが出来る。また後述する名護町（長町）が、名長の浦に由来するのは、この周辺部が臨海地帯であった証拠と言えよう。

「今宮町志」（一九二六〈大一五〉年刊）によれば一八九七年（明三〇）第一次大阪市域拡張で、村の北部が大阪市に編入されたとき、今宮村は木津村と合併しても一一三戸の寒村であった。分割以前の一八九一年（明二四）は一〇二五戸であったことから見ても、村の八〇％以上が、大阪市南区に編入されたことになる。

しかし、次の数字を示す通り、今宮村の人口は漸次増加する。

一九〇一年（明三四）　二〇〇戸　一千人
一九一〇年（明四三）　一六〇〇戸　一万人

になり、大阪市編入の前年一九二四年（大一三）には、戸数一万八四六七戸、人口は七万五四四〇五人（男三万九五七二人、女三万五八三三人）であった。ちなみに元釜ケ崎の東西入船・甲岸の人口は次の通りである。（一九二四年）

町名	戸数	人口 合計	男性	女性
東入船	三五六	二六一七	一五八二	一〇三五
西入船	四五八	二二六四	一二五九	一〇〇五
甲岸	一二二	四〇五	一九三	二一二
合計	九三六	五二八六	三〇三四	二二五二

今宮町人口の八パーセントを占める東西入船、甲岸の人口急増は、大阪市の都市政策とくに南区日本橋筋三丁目～五丁目いわゆる名護（長）町政策と深く関係している。

一八八八年（明二一）、時事新報記者として名護町を視察した鈴木梅四郎は、こう紹介している。

「右名護町五丁目までの間は商売も可成り繁盛し貧民少なく正業者多かりしにも拘わらず、名護町さへ謂へば大阪の人々一概に貧民無頼の徒の巣窟なりと認定するを常とする程なりければ、此間の人民名護町何丁目と称するを厭い、遂に時の挙行に情願し、日本橋通何丁目と改称するは今より数十年前のことなり。左れば名護町の旧名を称し来りは其五丁目以南なりしに、維新の際此五丁目以南も亦名護町の唱名を廃し今の如く日本橋と通称し、旧と九丁目に分ちし処を五丁目に纏め分ちたり。而して所謂貧民無頼の徒の巣窟は今の日本橋三丁目より五丁目までの間、即ち維新頃まで名護町と称し来りし処なりとす」（「大阪名護町貧民窟視察記」一九一六年刊。この著書は著者が一八八八年一二月『時事新報』に連載した「大阪名護町貧民社会の実況紀略」を単行本にしたものである。）

鈴木梅四郎が紹介するように、一八八八年には名護町も釜ケ崎同様、地図上行政上は存在しない町名であったが、大阪

市民の間では「貧民無籍の徒の集居」の別称として使用されていた。

名護町は、前述の通り名呉の浜の通名でのち長町に転訛したと言われている。

一方、日本橋から南に伸びる狭長な町並に由来するとも言われている。

長町一丁目～五丁目の記述は、すでに一六九三（元禄六）年に見られる。しかし、一七九二（寛政四）年、長町一丁目～五丁目は日本橋一～五丁目と改称され、長町は六～九丁目となるが、一八七二（明五）年日本橋一～五丁目と長町六～九丁目は、日本橋筋一～五丁目と改称された。

交通の要としての長町（以下長町に統一）に人々が集まり出したのは、一七世紀つまり江戸初期である。大阪町奉行は一六一九（元和五）年、旅人宿（旅籠）の営業を許可する。大阪市内の許可二三ケ所中、十ケ所が長町であった。

旅人宿（旅籠）が出来ると、旅人のみならず、米搗、酒造油絞り等の力者つまり肉体労働者たちも集まり、職人の町を形成しはじめた。これを見越して、一六六三（寛文三）年、町奉行は木賃宿三十軒の営業を許可する。これは、長町の労働者街形成に拍車をかけることになった。さらに、天王寺付近に乞食・「非人」が野宿するので木賃宿二十軒の営業を許可した。長町の木賃宿化つまりドヤ街化が一段と進められた。

一八八八年の長町

⑤

いささか飛躍のきらいはあるが、今宮村大字今宮字釜ケ崎がのちに「第二名護町」と呼ばれたことを考えるとき、明治二十年代の長町を理解することは、江戸時代の長町を理解する以上に重要である。鈴木梅四郎の紹介に基きながら、その輪郭を整理してみたい。

一八八八年（明二一）、鈴木梅四郎が長町（日本橋三～五丁目）を訪ねたときの人口は次の通りである。

戸数　二二五五戸

人口　八五三二人（男四三〇七人、女四二二五人）

（一）家賃

月極組（三〇％）月六〇銭～三〇銭

日々組（七〇％）一日二・五銭から〇・八銭

月極組は一定の借家に住み、生活も比較的安定していた。日々組は、一定の職業を持たず生活も不安定で、食物は残飯を煮にしてすすり、近所からもらう魚のアラ、野菜等を食べた。家賃は相対的に月極組より高く、その上家主による取り立ても厳しかった。

（二）生活費（鈴木梅四郎氏の計算による）

五人家族（老人・夫婦・子ども二人）

上級一人　九円七八銭
中級一人　八円二四銭
下級一人　五円八七銭

衣類等はほとんど購入せず，必要に応じて借りた。布団等は，木賃宿にそなえつけであった。

（三）職業（含無職）　一八八八年九月三〇日調査

全人口八五三二人　内成人（十五才以上）人

無職	四五一
雑業	一七一六
屑拾	九八〇
被服	一一〇六
マッチ	五九七
傘	一〇九二
乞食	五七七
普通商	八二二
工業	二六二
職夫	四四六
	一九九
	三三一
	三四一
	三三〇

気がつく第一点は，意外なことに成人の無職・乞食が少ないことである。第二は，職業は雑業・屑拾・被服に集中していること。第三は，一五歳以下の子どもたちも屑拾いをして生計を助けている点であり，第四は工業・職夫等の分野でも働いていることである。

（四）教育

学生　一四二人（男八八人　女五四人）

一八八六年（明一九），実は近所の小学校が廃校になっている。子どもたちにとって，生活することが第一であって，教育はその次であった。明治初期学校令により小学校が建てられた時には，四〇〇人の子どもたちが登校したが，食物も充分にない子どもたちにとって授業どころではなかった。

（五）衛生・・・コレラの大発生

一八八五年（明一八）大阪市にコレラが大発生する。上下水道とも不完備の長町の住民はコレラに直撃される。

コレラ発生　二九八〇戸中　四二二戸
コレラ感染　八九七二人中　四七七人
死亡　四七七人中　四二七人

コレラは八戸に一戸の割合で発生し，二〇人に一人（感染者の九〇％）がコレラで死亡した。

長町の強制移住

大阪市はかねがね長町の撤去を計画していた。実現に至らなかった。しかし，コレラの大発生は長町撤去のいい口実であった。大阪府は翌年（一八八八年），長町の移転を計画し五万円の募金までするが，反対にあって実施できなかった。

計画とは、西成郡難波村字曙良の畑地に一区長屋村をもうけて長町を強制移転させようというものであった。また、長屋建築規則などをつくり、撤去計画をたてたが、いずれも家主地主の反対が大きな原因で不発に終っている。

移転計画が実現する機会がやって来た。否大阪府市はこの機会を最大限に利用したと言う方が正確であろう。

一九〇三年（明三六），第五回内国勧業博覧会が大阪市南区天王寺今宮で開催されることが一九〇〇年（明三三），「勅令」で決められる。「勅令」とは言うまでもなく天皇による決定である。博覧会のねらいは不況に苦しむ大阪経済のかさ上げにあった。

会場が天王寺今宮に決まると梅田から会場までの道路整備が計画される。その際，旧紀州街道の拡張が考えられたが，問題は長町の木賃宿街であった。そこで「天皇の通過」を理由に宿街の立ち退きを強行する。抵抗する長町住民は「天皇行幸」を理由に弾圧され大阪鉄道の南部即ち今宮村大字今宮字釜ケ崎に移住させられた。釜ケ崎形成の第一歩である。

ところで「天皇行幸」の実際はどうであっただろうか。明治天皇は，勧業博覧会開催中（三月一日～七月三一日），京都御所に宿泊し四月二十日～五月三日まで七回「天覧」のため来阪している。何度，この拡張された紀州街道を通ったかは不明である。。記録（「明治天皇大阪御駐車覧要録」大阪市明治天皇記録館・一九三七年刊）によれば，第一回の四月二日は梅田駅から会場へ向かったことが記録されている。第二回目四月二三日は，列車で会場へ直行している。「城東線博覧会停車場御駐車」とある。第三回以降は不明である。わずか数回の「行幸」のために道路の拡張と沿線住民の強制移住を行ったというより，長町の強制移住に天皇制を最大限利用したとみるのがむしろ妥当ではないか。

この強制移住を裏付けるように，一九〇一年（明三四）から今宮村の人口が増加しはじめる。

さらに，一九〇八年（明四一）市電南北線（難波－今宮間）の開通にともないまたも長町沿線住民は，今宮村大字今宮釜ケ崎へ強制移住させられた。

またこの内国勧業博覧会では「人類館事件」と呼ばれる許しがたい民族差別事件があったが，ここではその指摘にとどめておく。

以上のような過程をへて，長町住民は釜ケ崎への移住させられた。中でも一九〇三年（明三六）の第五回内国勧業博覧会では「天皇の行幸」という天皇制を手段に，大阪市は長町住民を市外へと追い出すことに成功した。

大阪府の長町移住計画

長町は一七世紀以来，常に特別視され，その排除が計画されて来たが，第一次大阪市拡張以降は，長町の市外追い出し

が組織的かつ計画的に行われるようになる。

市域拡張の翌年一八九八年（明三一）四月に，大阪府知事時任為基は，大阪府公報号外で次のように告示した。

「明治二四年六月府令第三六合宿屋規則左ノ通改正ス」

府令第三六合改正の要は，第四章木賃宿の項「第三二条木賃宿ハ大阪市・堺市（並松町ヲ除ク）ニ於テ営業スルコトヲ許サズ」にあった。

第一次市域拡張を機会に木賃宿営業禁止つまり長町の木賃宿の排除が，規則改正の目的であったことは言うでもない。そして，長町住民の排除・移住は，さきにみたように第五回内国勧業博覧会・市電南北線の開通で完了する。これは同時に，大阪市民にとって釜ケ崎＝長町＝貧民無頼の徒の集窟という図式ないし意識の形成を意味した。

一九一六年（大五）一二月四日の大阪府公報第四二二号はそれを行政の側から裏付けた。

公報は，戸口調査（今日で言う国勢調査）方法に関する告示であるが，第一三条に次の一節がある。

「但シ水上生活者・外国人・兵営・監獄及ビ左記町村ハ調査セサルモノトス」

戸口調査外の町名として，堺市並松町・大阪市南区日本橋三丁目・天王寺細谷町・東成郡鶴橋町ノ内大字猪飼野自一八四～至一八五番地・東成郡鯰江町ノ内大字今福と並んで，西成郡今宮村ノ内釜ケ崎（俗称）・鎮守会社跡（俗称）などがあげられている。

大阪府が，一九一六年の段階で今宮村大字今宮釜ケ崎周辺を特別な地域と認定していることになる。当時，釜ケ崎はれっきとした一町名にもかかわらず，行政自らが（俗称）と呼ぶ理由は，町名を越えたある実態を表現していることになる。

「細民集団地区」としての釜ケ崎

釜ケ崎の特別視は，一九二一年（大一〇）に内務省社会局第二部によって実施された「細民集団地区調査」でさらに明らかにされる。町名釜ケ崎が地図上から消滅する前年に，国家が釜ケ崎を「細民集団地区」と特定したことになる。

この調査では，東京，大阪，京都，神戸，横浜，名古屋の六大都市における代表的細民集団地区一四ケ所が選定され，地区所在の府県および市の社会課と警察の手によって実施されるという大々的なものであった。

「細民集団地区」としての釜ケ崎を理解するためにも重要と思われるので，釜ケ崎を中心にこの調査の概要をここに紹介してみたい。

調査地区（一四地区）

東京・深川猿江，浅草町，四谷旭町

大阪・六道ケ辻、釜ケ崎、長柄
京都・天部寺裏、柳原
神戸・新川部落、番町部落
横浜・浅間町、乞食谷戸
名古屋・水車、玄海

調査内容
①地理的状況　②戸口　③衛生　④要保護者　⑤学事
⑥社会施設　⑦木賃宿　⑧地区内特殊商店

（一）人口
深川猿江　八〇五九人（男四二四四人・女三八一五人）
釜ケ崎　七六九三人（男四七五七人・女二九三六人）
釜ケ崎の人口は一四地区中東京深川猿江について第二位である。その男女比は、深川猿江がほぼ同じなのに対して、釜ケ崎の場合、男が女より一八二一人もおおい。同じことは東京の浅草についても言える。人口四九六四人中男は、二九九六人で、女は一九六八人に比較するとき男が一〇二八人も多い。他の地区の男女比はほぼ五〇対五〇である。

（二）職業（人夫・手伝）
釜ケ崎　三四二人
浅草　二三七人

釜ケ崎の場合、土工工夫一二七人を加えると労働人口一七一三人中実に約四分の一にあたる四七〇人が、土工として働いていることがわかる。釜ケ崎が既に労働者の街であることを物語っている。

（三）犯罪（順位は一四地区中における釜ケ崎）
・賭博犯　六七六人（四五・四九％）　一位
・強窃犯　八七人（一四・〇三％）　四位
・殺人傷害犯　一七人（一・九六％）　三位
・三犯以外の人数　二五九人（四一・五七％）　一位
釜ケ崎は人口一〇〇〇人に付き、犯罪経歴者（前科者）は五四・三四％で、神戸についで一四地区中第二位である。

（四）衛生
釜ケ崎の伝染病は、痘瘡二二人の発生があるが、痘瘡は一四地区合計が三九人なので、釜ケ崎一地区で約五〇％の発生をみることになる。また伝染病の発生も合計三一件と一四地区中第一位である。これに対して医師・助産婦ともゼロというのが、釜ケ崎医療の現実である。

（五）木賃宿
木賃宿は九地区にあり五地区にはない。

釜ケ崎は四五軒と名古屋水車の六三軒につぎ第二位であるが，宿泊者四一四五人（有世帯二八〇五人・無世帯一三四〇人）で水車八九六人（有世帯七四二人・無世帯一五四人）に比較するとき木賃宿街の大小が比較できる。比較的大きい東京浅草でも宿泊者一四三二人（有世帯五六七人・無世帯八六五人）と釜ケ崎の三分の一であるが，無世帯が多いのは釜ケ崎と共通する。つまり単身の労働者が生活していることになる。

これらの実態調査に基き，釜ケ崎を内務省の言う「細民集団地区」として形容すればどうなるだろうか。

多数の単身の土工労働者，かつ在監経験者が多いうえ，衛生状態は悪く伝染病もよく発生するが，医療機関は皆無の日本一の木賃宿街ということになろう。

このような状況に対して唯一力を入れたのは今宮警察署である。釜ケ崎巡査派出所をおき，「釜ケ崎」である甲岸町，東西入船町の治安対策にあたらせたことが，一九二九年（昭和四）度の大阪府統計に記録されている。

米騒動と釜ケ崎

「細民集団地区」調査は釜ケ崎が鈴木梅四郎の指摘する「名護町」と多くの点で共通することを明らかにした。三三年前（一八八八年）の「名護町」（長町）は，三三年後釜ケ崎で生き続けていると言えよう。

一町名としての釜ケ崎が，ある実態をもつ状況をあらわす「釜ケ崎」へと変容した背後には，大阪府市さらには日本の國家政策が大きく働いたことは否定できない。ここまで変容したものは，単なる町名変更（一九二二年・大一一）で変わるものではない。それは一九六一年の釜ケ崎第一次暴動後行政が「釜ケ崎を　あいりん地区　と呼び変えても，実態が何も変化しなかった」ことと共通すると言えよう。

町名改称の背後には，一九一八年（大七）の米「騒動」があったと言えないだろうか。

釜ケ崎を「細民集団地区」と呼んではばからない行政は，一方では何ら根本的な施策を行わなかった。それに対する釜ケ崎住民の人間としての反撃が米「騒動」と理解できる。米「騒動」後の行政による対応は，第一次暴動（一九六一年）後の行政の対応を思い出させる。たとえば「騒動」後の一九一九年（大八）にはまず釜ケ崎の木賃宿対策として「方面委員制度」（今日で言う民生委員）が活動をはじめる。一九二三年（大一二）花園に公設市場が開設される。一九二五年（大一四）には日雇労働者対策として花園に職業紹介所が業務をはじめる。

米「騒動」前後の釜ケ崎を「今宮町志」はこう説明している。

「今宮町は大阪市接近町村中，行旅病人及び同死亡人の多き事に於て第一位を占むるであろう。今宮は天下の行旅病人の集合地だと言はれている。何故，斯く多数の行旅病人が我が今宮町に来るのか。それは今宮町に四十軒の木賃宿がある為である。従来今宮警察（註ー西成署の前身）より引渡を受け今宮町に於て救護取扱いをした行旅病人及び同死亡人の身元を調査するに，其殆んど総てが病倒前木賃宿を目標に尋ねて来て，所々徘徊中，遂に病身の為倒るるに至りたるを見てもわかる。」

当時の行旅死亡人は年平均約一００人内外と言われている。

むすびにかえて

町名釜ケ崎が公に消滅した日は，一九二二年（大一一）四月一日である。いまから六三年前になる。しかし，実態としての「釜ケ崎」は今日もなお存在し続けている。

「釜ケ崎」の歴史は，また長町の歴史である。「釜ケ崎」の形成は，長町を抜きに語ることは出来ない。もし，長町六～九丁目が長町一～五丁目から分離された一七九二年を長町の歴史の始期とすれば「釜ケ崎の歴史」は実に約二００年の長きを有する貧民側の歴史と呼ぶことができる。

しかし，そこにはまた住民の抵抗の歴史があったことも忘れてはならない。たとえば，一九０三年の第五回内国勧業博覧会に際しての強制移住反対，一九一八年の米騒動への住民参加。ここにわたしたちは，釜ケ崎住民の人間としての叫び抵抗の精神をくみとることが出来る，といっても過言ではあるまい。

以上

（一九八五・一一・三０）

今宮村大字今宮字内
畑
道
海
中
畑
道
堂
大
阪
市
南
区
水
崎
町
畑
広
堂
大
阪
市
原
地
字
甲
畑
畑
畑

戦後の「釜ケ崎」

（人口推移を中心に）

（家族もち）から単身者の町へ

牛草英晴

戦後の「釜ケ崎」は戦災による焼跡から始まる。一九四五（昭二〇）年、三月十三日のいわゆる大阪大空襲によって「釜ケ崎」の中心地域、東西入船町・海道町・甲岸町（今の萩之茶屋一・二丁目辺り）の大部分は焼失した。敗戦の混乱を経て、戦後経済の復興とともに「釜ケ崎」は不死鳥の如く復活し、一九六一（昭和三六）年の第一次暴動の頃には戦前を大きく上回る規模になっていた。現在「釜ケ崎」は住民数約四万人余、うち日雇労働者二万人余と、日本最大の「寄せ場」「ドヤ街」となっている。この人口比からも明らかなように「釜ケ崎」は経済的にも、社会的にも全面的に日雇い労働者に依存しているのである。日雇労働者が日銭を稼いで、ここで消費しない限り、「釜ケ崎」は一日たりとも成り行かない。

戦後「釜ケ崎」は住民数・構成、商店・飲食店、ドヤなど町並も様々な膨脹・変化を遂げてきた。この項ではこのうち人口の推移に焦点を当て、戦後の「釜ケ崎」の歴史を見ておきたい。

一　戦後の町名変更と「あいりん地区」の呼称

本題に入る前に、戦後の町名変更について記しておく。戦後の「釜ケ崎」地区の町名は一九七三（昭和四八）年の大阪市の町名改正まで戦前の町名が残っており、この改正によって、表Ⅰの様に変わり、現在に至っている。このうち「釜ケ崎」の中心地域である「萩之茶屋」の町名は明治以降一度も用いられることはなかったが、この名称の由来は江戸期に住吉街道沿いの広田神社（浪速区）付近にあった「萩之茶屋」（南北二店あったうち南店が今の萩之茶屋付近にあったとされる。）という茶屋にありとされる。（『今宮町志』）

○「あいりん地区」の呼称

「釜ケ崎」という地名は戦前史（小柳論文）の中で指摘されている如く、一九二三（大正十一）年以降は行政町名としては存在しない。しかしながら、それ以降も社会的問題地域としての俗称としては行政上も一般的にも使用されてきた。戦後についても同様である。それが「釜ケ崎」に代わって「あいりん地区」の呼称が用いられるようになったのは一九六一年の第一次暴動以降「釜ケ崎」が世間の耳目を集め、行政の目が事後的に向けられ、改善が実施され出してからである。

正式には一九六六（昭和四一）年五月の大阪市・大阪府・大阪府警察の三者連絡協議会においての申合せによって、この地区の統一呼称として「あいりん地区」を使用することが決まり。これ以降、行政呼称、マス・コミ用語として定着した。この呼称の変更の経緯については少し説明を要する。戦後の「釜ケ崎」で「愛隣」の呼称が最初に用いられたのは山谷暴動（一九六〇年）の後、地元の有力者を中心に「西成愛隣会」なる民間団体（一九六一年四月）においてであった。彼らは山谷暴動が「釜ケ崎」に及ぶことを本能的に予感していたのかもしれない。果して同年の八月一日にあの第一次暴動が起こったのである。この時、新聞・テレビを通じて「釜ケ崎」の名は全国に轟き渡った。そして「釜ケ崎」はスラムの代名詞となり、「釜ケ崎」は怖い所、恐ろしい所というイメージ（ステロ・タイプ）が定着した。それまでは「釜ケ崎」地区にスラムとしての矛盾があったにしても社会的に認知されているとは言えなかった。暴動直後の毎日新聞に西成の一市民の次のような投書が載った。

「西成暴動」という見出しの記事が紙面をにぎわしまたが、事件の起こった釜ケ崎は西成のほんの一部で、全部ではありません。なぜ釜ケ崎事件とせず、西成事件と呼ばれたのですか。（一九六一年八月五日）

投書を受けてこの記事は識者を動員してどう呼称すべきかを論議しているわけだが、事の本質は「善良なる市民」とイメージの悪いスラムと一緒くたにされたらかなわんということにつきるだろう。その後も呼称に関する論議は続いたようであるが、このような事情を背景に、イメージ・アップと行政努力の姿勢を示そうとして、先きの三者連絡協議会の決定をみたのである。しかし、呼称変更と問題解決とは別物である。実際にも、呼称の使われ方は、行政、マス・コミでは「あいりん地区」が定着しているが、一般的には、「釜ケ崎」「西成」の呼称が、現在でも広く使用されている。「釜ケ崎」と呼称する場合でも、その意味するものはさまざまである。呼称変更に行政・権力の欺瞞を感ずる者は無意識的に「釜ケ崎」と呼ぶ。他方差別と偏見に満ちた人々もまた、差別的に「釜ケ崎」という。「西成」についても然りであり、「釜ケ崎」への利害関係、地理的・社会的距離、社会的立場により呼称の使われ方は異なる。このような呼称の混乱は「釜ケ崎」問題の難しさと、深刻さを示すものであり呼称変更で解決されるということでない証左といえよう。

二　「釜ケ崎」の範囲

一口に「釜ケ崎」と呼ぼうが、「あいりん地区」と云おうが、一般的には地域の範囲は明確でない。また「釜ケ崎」を

如何なる性格のスラムと規定するかで地域の広がりも変わってくる。したがってここでは一応の概念規定と地域の限定を行っておきたい。

○広義の「釜ケ崎」（「あいりん地区」）

前出の「あいりん地区」変更を決定した三者連絡協議会で大阪市民生局は地区の範囲として、東四条一～三丁目、東入船町、西入船町、甲岸、海道、東萩、臭船、東田、今池、東今船、山王一～四丁目の十六町を示している。また西成労働福祉センター発行の事業報告（第二十号）では花園北一・二丁目（一部）、萩之茶屋一・二丁目、三丁目（一部分）、太子一・二丁目、天下茶屋北一丁目（一部）、山王町一・二丁目・三丁目（一部）の一一町丁を上げている。両者はほぼ一致する。したがって行政当局が想定する「あいりん地区」ははっきりしている。ただこの地区に入っていない地域でも「あいりん地区」と同様又は類似している地域がある。例えば環状線をはさんだ浪速区の水崎町、馬淵町の一部は「あいりん地区」の延長地区と考えた方がよいのではないか。いずれにしても、行政当局が指定する「あいりん地区」はかなり広範な地域が含まれている。

ところで例の三者連絡協議会において、府警察本部は防犯対策上、「あいりん地区」を次の三地域に分けている。

①暴力団や麻薬犯罪者の多い山王地区（山王町一・二・三丁目）

②労務者（推定一万五千人）の多い萩之茶屋地区（東西入船、海道、甲岸、東萩、東四条各町）（傍点引用者）

③両者の交流地区（東田、今池、臭船各町）

（朝日新聞一九七一年六月一六日）

①の特徴づけには、問題はあるが、このように「あいりん地区」と行政によって指定される地区には性格の異なる地域が複雑に含まれていることがわかる。したがってこの場合「あいりん地区」をスラムとするとき、かなり包括的な意味で使用していることになり、地域的にも広範囲を含んでいることになる。

ただこのような規定が地元の人、また一般市民にどう受け取られるかは、別問題である。当地区近くに居住すればするほど、地区の範囲を狭く受けとろうとするし、遠くに居住し関心も薄ければ薄い程、漠然と広く認識し、「あいりん地区」「釜ケ崎」をより広く「西成区」と等置して受けとるであろう。

○狭義の「釜ケ崎」（「あいりん地区」）

行政の指定する「あいりん地区」のうち、山王地区と萩之茶屋地区とでは住民や街並の構成の点で大いに異なっている。まず山王地区は南北に動物園前一番街（旧飛田本通）、東西に旭町遊商店街を中心に、山王町一・二丁目は戦災を免れた

ため，老朽の家屋が狭い地域に密集している商・住混合地区となっている。山王町三丁目は旧赤線であって料飲店が集中しており，いわゆる風俗営業地区となっている。ドヤや日払アパートなどは，少なく，日雇労働者も少ない。一世帯当たりの人員も萩之茶屋地区に比べると多い。（一九八〇年，山王三丁で二・一三人）　つまり，比較的家族持ちが多いことである。この意味では山王地区は「釜ケ崎」の中では旧スラムの概念があてはまる。町の概観としては，下町の不良・老朽住宅が密集し住民は社会階層的には下層に属し，貧困層が集住している。

これに対し萩之茶屋地区は明らかに異なる。「寄せ場」を中心にドヤと食堂・飲屋などがたち並ぶ，「ドヤ街」を形づくっている。住民は，それらの自営業者とその家族，及び従業員の他は，日雇労働者が人口の大半を占めている。しかも彼らは単身者の男である。つまり萩之茶屋地区は単身の日雇労働者を中核とした「寄せ場」社会，「ドヤ街」社会であるといえる。行政の労働・福祉をめぐる諸施策も，日雇労働者に係わるものが中心である。かくて「釜ケ崎」問題の中核を日雇労働者問題とするとき，自からその地域も，萩之茶屋地区を中心に限定されてくる。したがって，この意味で「釜ケ崎」を問題にするとき狭義の「釜ケ崎」と呼ぶことにする。

二　「釜ケ崎」の人口の推移

「釜ケ崎」は労働者の町と云われているが，その人口の推移，人口構成において極めて特異な様相を呈している。そこで，簡単な人口分析の面から「釜ケ崎」社会の特性を示したい。

○西成区の人口推移

西成区はその中に「釜ケ崎」を含んでいるためか，大阪市の他区の人口構成とは異なった動きを示している。表Ⅱは西成区の人口の推移である。人口のピークは戦前の一九四〇（昭和十五，大阪市全体も同様）年の二一万五八二八人で戦時中激減し，戦後この水準に近づいたのは一九六〇（昭和三五）年で二一万四六五四人で，これが戦後の最高である。その後は大阪市の人口減と並行して西成区の人口も減少し続けている。いわゆるドーナッツ化現象である。戦時大阪空襲直前には一八万人強人口があったが，空襲後の一〇月には八万人弱まで減少し，実に空襲の前の四三％になっていた。その後，一九五〇年までに約七万人増加し，更に十年後の一九六〇年までに六万人増えている。西成区の人口増加を一九五〇年までを第一段階，一九六〇年までを第二段階とすれば，まず第一段階では戦時の疎開者，罹災者が復興とともに帰って来た人々が大多数であろう。（『西成区史』によれば疎開者六万七七二三人，罹災者三万八〇四一人）　もちろん仕事を求め宿を求め新らたに流入してきた人口もあろうが，数ははっき

りしない。ただ敗戦直後には家もなくバラックに住んだり、「浮浪者」的な生活を余儀なくされていた人々が大勢いたが一九四九（昭和二四）年、西成区内の行旅死亡人は十九人（『西成区政誌』）であったという。この数は最近の行旅死亡人の最も多い年（一九八三年）の約十分の一弱にすぎない。単純に推測することはできないが、当時の経済状況、人々の生活状態を考えれば、その数は意外に少なく、したがってそのような危機にあった、「浮浪者」的生活者の絶対数が「釜ケ崎」では現在よりかなり下回っていたと考えられる。したがってこの層と連動する日雇労働者など下層労働者大衆も今に比べれば、かなり少なかったであろう。

第二段階は朝鮮特需景気から高度経済成長の時期である。この期の増加分約六万人はその大半は社会増、つまり日雇労働者を中心とした流入人口と考えるのが妥当である。一九五五～六〇年の間には世帯人員が減少し始めており、この時期急速な自然増は考えられないからである。

つぎに、世帯人員についても西成区は特異である。戦前、一九四〇年は一世帯当たり、四・三八人で、四五年に三・三三人となり、五五年には四・一七人となって戦後最高となり、その後は減少の一途である。八〇年にはついに二・三六人となって大阪二六区のうち最低である。（大阪市全体は二・八三人）

また男女の人口比についても、通常は同数に近いか、女性人口が多い。ところが西成区は一九六〇年にはそれまでの女性上位が逆転し、男が上回って、一九八〇年に男約八万人、女約七万人と男が一万人も多くなっている。因に男性人口が上回っているのは、此花区・港区・大正区・西淀川区・鶴見区と西成区で、これらの区は鶴見区を除いてすべて大阪湾沿岸にある工場と住宅の混合地帯にある。以上のことからは六〇年以降西成区人口は減り続けながら単身日雇労働者は増え西成区人口の中で比重を高めていることを示唆するのである。

○「釜ケ崎」の人口推移と構成

「釜ケ崎」地区の人口約四万人余、内労働者二万人余とここ十年来云われてきた。西成労福祉センターの事業報告や府警の『あいりん地区の実態（あいりん白書）』などでもこの説をとっている。しかしこの数値はあくまで推定に過ぎない。一九八〇年の国勢調査での広義の「釜ケ崎」の人口は三万一八七六人であった。この数は推定四万人とかなりかけ離れているが、これは「釜ケ崎」の特殊事情による。人口の約半分を占める日雇労働者の居住形態が影響している。日雇労働者は移動的・流動的労働力であって「釜ケ崎」を拠点としながらも、いつも定住しているわけではない。通常彼らはドヤを生活の場としているが、住民登録をしている者はごくわずかである。また飯場就労・出張している者は、その間「釜ケ崎」を留守にしていることになる。つまり月の半分位を飯

場で暮らし，残りを「釜ケ崎」で生活するといった具合である。また，アオカン（野宿）者も多く，これらの人々は国勢調査などの際に，調査不能・漏れが生じる可能性がある。それが推定数と国勢調査数との差となっている。日雇労働者数を知る手掛りは，「日雇雇用保険」（通称白手帳）への加入状況である。これとて，加入していない労働者が少なくないわけで総数は正確には分からない。したがって「釜ケ崎」の人口，労働者数については，国勢調査・白手帳所持者数・「寄せ場」からの就労者数・ドヤの宿泊者数などから推定するしか手はない。

○「釜ケ崎」の人口推移と特性

「広義」「狭義」の「釜ケ崎」人口の推移が表Ⅳ・Ⅴである。「広義」のそれは前述の西成区全体の推移と大体，同じ傾向を示している。ただ男女比が二対一と圧倒的に男人口が優位を示していること，世帯当りの人員が更ににが少ないことが指摘できる。この傾向は「狭義」のそれについても一層明確である。

ドヤ街としての「釜ケ崎」は一九五五年以降男女比の不均衡が現れ始め，その後一貫して続いている。一九八〇年では男女比は五対一となっており，全くの男社会となっている。しかし実際は更に格差は大きいと思われる。というのは，国勢調査で漏れの推定部分はほとんどが男であるからだ。（世帯人員・男女比についての詳細は「労務者渡世」第三六号参照）

「狭義」の「釜ケ崎」の人口は一九六〇年に一つのピークをむかえている。この時期は，高度経済成長で岩戸景気の真最中である。それとともに，人口の都市集中が起った時期であり，「釜ケ崎」も同様であった。他面，日本社会全体に，マイルド・インフレ，公害，環境破壊，社会的不均衡が生じ始めた時で，また政治的には第一次安保闘争で世の中が騒然としていた世情であった。一九六一年は岩戸景気も終わり，不景気の入口にあった年で，この八月一日に第一次釜ケ崎暴動が起きたのである。（「釜ケ崎」ではその後一九七三年まで，前後二十回の暴動が起きている。この点に関しては別稿で論ずる必要があるが，ここでの主旨から逸れるので言及しない。）　この暴動の後，「釜ケ崎」人口は減少するが，一九七〇年には最大に達する。これは一九六〇年をピークとして現在まで減少し続けている大阪市・西成区の人口とは対照的である。しかも女人口は減り続けているのに対し，男人口は増加し続けている。この結果，男女の大幅な不均衡となったのである。一九七〇年に開催された万国博の建設ブームとそのための行政による労働力確保が影響していると思われる。表Ⅴによれば一九七五，八〇年と大幅に減っているが，これは町名変更でそれ以前と地域が変わっているので比較できない。万博ブームのピーク時よりも多少減っているだろうが，

大幅減はなかったと思われる。日雇雇用保険（表Ⅲ）が定着した一九七四年以降増減はあるものの表Ⅴの人口減程大きくないからである。万博時の増加からオイル・ショック（一九七三年）を経て、「釜ケ崎」の労働者の矛盾が噴出した。「万博棄民」ということばが生まれた位で、一九七五年には仕事・求人は底をついた。その後回復はみられたものの、景気変動、季節によるアブレ（失業）が続いていることには変わりはない。特に最近、日雇労働者が老齢化しており、年令・体力・技術のある者などの差によって日雇労働者内部でも階層分化が進んでいる。最近の調査によれば平均年令は四十才台後半であり、第一次暴動時の三十才台よりも十才は高齢化しているのである。

これまでの分析から、第一次暴動前後から「釜ケ崎」は人口が急速に増え、しかも単身の男の日雇労働者の街と変わってきたのである。この日雇労働者の単身性は建築・土木の下層の労働力としての経済的意味、他方労働者自身の日常生活生活方などさまざまな点で根本的に規定する要因として重みをもつものとしてある。さらに「釜ケ崎」の人口推移を規定する社会・経済的構造との関連については触れることができなかった。この点に関しては別稿に譲る。

四　「釜ケ崎」社会の二重構造

――監視される社会・差別される社会――

「釜ケ崎」の街を歩いて見るとあちこちの街角の頭上にテレビ・カメラが目を光らせているのに気付かれるであろう。これは警察署のモニターに通じていて、四六時中、街を監視しているのである。また、「釜ケ崎」は不思議な街で、冬の夜、水撒きをするのである。泥酔者や、宿のない者がドヤの周囲や路上でアオカンするのを防止しようとするのである。夏には「釜ケ崎」の街にも広田神社の御神輿が出る。しかし参加しているのは地元の商店の人と子供だけである。日雇労働者は遠巻きに眺めているだけである。また、毎年三角公園で地元主催の無縁仏慰霊祭が開かれる。慰霊されるのは日雇労働者の最も下層部分の終局の姿なのである。しかし、彼らの仲間である、労働者の参列は少ない。彼らに慰霊の心がないのではない。日雇労働者と地元住民、行政の間には両者を隔てる壁があるからだ。

「釜ケ崎」は日雇労働者に依存した街である。労働者の稼ぎ出す賃金と日雇雇用保険の給付金、年末・盆の福利厚生一時金など合わせて約二〇〇億円前後が街に落とされる。労働者はドヤで寝起きし、飲食店で食を満たし、衣服を買い、パチンコをして娯楽としている。この意味では地元のドヤや商店街は経済的には、一〇〇％労働者に依存している。したがって地元の側からみればお金を持って来る限りでは上客である。しかし、商店主と客の関係にすぎない。金を持たない労働者は地元にとって邪魔者以外の何者でもない。好況で仕事

のある時はよい。不景気で仕事にアブレ，また老齢やケガ・病気で働けなくなれば，たちまちアオカン者が街に溢れる。合理化が建設・土木の分野に押し寄せ始めた，現今の社会経済状況下で，日雇労働者内部にも階層分化が進んで来ており，アオカン者・「浮浪者」も確実に増えている。因に今国勢調査では「住所不定者」（アオカン者）は西成区内は意外と少なく二〇一人だが大阪市内では一一七五人の多きを数え，これでも全区の調査結果ではない。この市内のアオカン者は「釜ケ崎」地区と流動関係にある。これらのアオカン者に対し西成警察署の肝入りで，「あいりん地区」浄化をめざした「あいりんクリーン作戦」が一九八〇年頃から始まった。ついで八二年には地元の振興町会をはじめ地元の約三十団体が参加して「あいりんクリーン作戦」推進促進協議会がつくられた。更に翌年の八三年には，「大阪二十一世紀計画」の一行事として，御堂筋パレードの際には「大阪クリーン作戦」として拡大され，市内からの「アオカン者」追放のキャンペーンにまで発展した。この際警察は「アオカン者」から指紋採取や写真を撮るという暴挙を行い，人権を侵害した。この思想は一九八三年二月発覚した横浜の中学生による「労働者虐殺事件」に通じるものがある。このような事実をみると，「アオカン者」にたいする社会の対応に象徴される様に「寄せ場」の日雇労働者は二重三重に，偏見と差別にとり囲まれていることがわかる。「釜ケ崎」は地域としては社会全体からはスラムと差別され，内部では日雇労働者は定住者でないということのみで住民と見られず，「釜ケ崎」の異邦人としてしか生きられない。

したがって「釜ケ崎」社会というのは，地元住民と日雇労働者が同一の場所に生きながら別の異質の世界をつくっている。この意味で「釜ケ崎」は二重構造の社会であり，それに止まるだけでなく，単身の日雇労働者に対する差別と偏見が日常化し，組織化された社会である。

牛草（18）　表Ⅲ雇用保険加入状況

年度	新規登録者	年度末有効者数	認定受給者数	1級給付金
1965	549	182	68	
1966	533	112	207	
1967	265	99	337	520円
1968	157	84	281	
1969	124	85	249	
1970	1000	1000	22474	
1971	5185	5555	29232	760
1972	6370	8964	47471	
1973	5631	11342	71466	1160
1974	6422	14206	78340	1770
1975	6640	16297	97035	2700
1976	4349	16653	100112	
1977	2812	15169	114904	
1978	2415	15426	132747	4100
1979	2351	16099	142537	
1980	2031	15739	149859	
1981	1918	15032	138221	
1982	2592	15128	131563	
1983	2758	15673	129422	
1984	4882	18881	151388	6200

69年度までは阿倍野公共職業安定所西成労働出張所への登録であり，70年度以降は「あいりん」公共労働職業紹介所の取り扱いである。

表Ⅰ 一九七三年町名変更

旧町名	新町名
東西入船町	荻之茶屋一丁目
甲岸町・海道町	荻之茶屋二丁目
東荻町・海道町	荻之茶屋三丁目
東田町	太子一丁目
今池町	太子二丁目
山王町一・二丁目	山王町一丁目
山王町三丁目	山王町二丁目
山王町四丁目	山王町三丁目
東四条町一・二・三丁目	北花園町

表Ⅳ「釜ケ崎」（狭義）の人口推移

	男性	女性	合計
1945	4949	5792	10731
50	10954	13136	24090
55	16110	17959	34069
60	18610	17592	36202
65	17237	15574	32811
70	21797	11739	33526
75	22090	11778	33868
80	21984	9892	31870

（1945年は11月1日調査で『西成区史』，他は国勢調査による）

表Ⅴ「釜ケ崎」（広義）の人口推移

	男性	女性	合計
1945	1824	1334	3158
1950	5484	5622	11106
1955	8816	7878	16694
1960	10313	8362	18675
1965	9701	7463	17164
★1970	15754	5620	21374
1975	12107	3162	15269
1980	13057	2569	15626

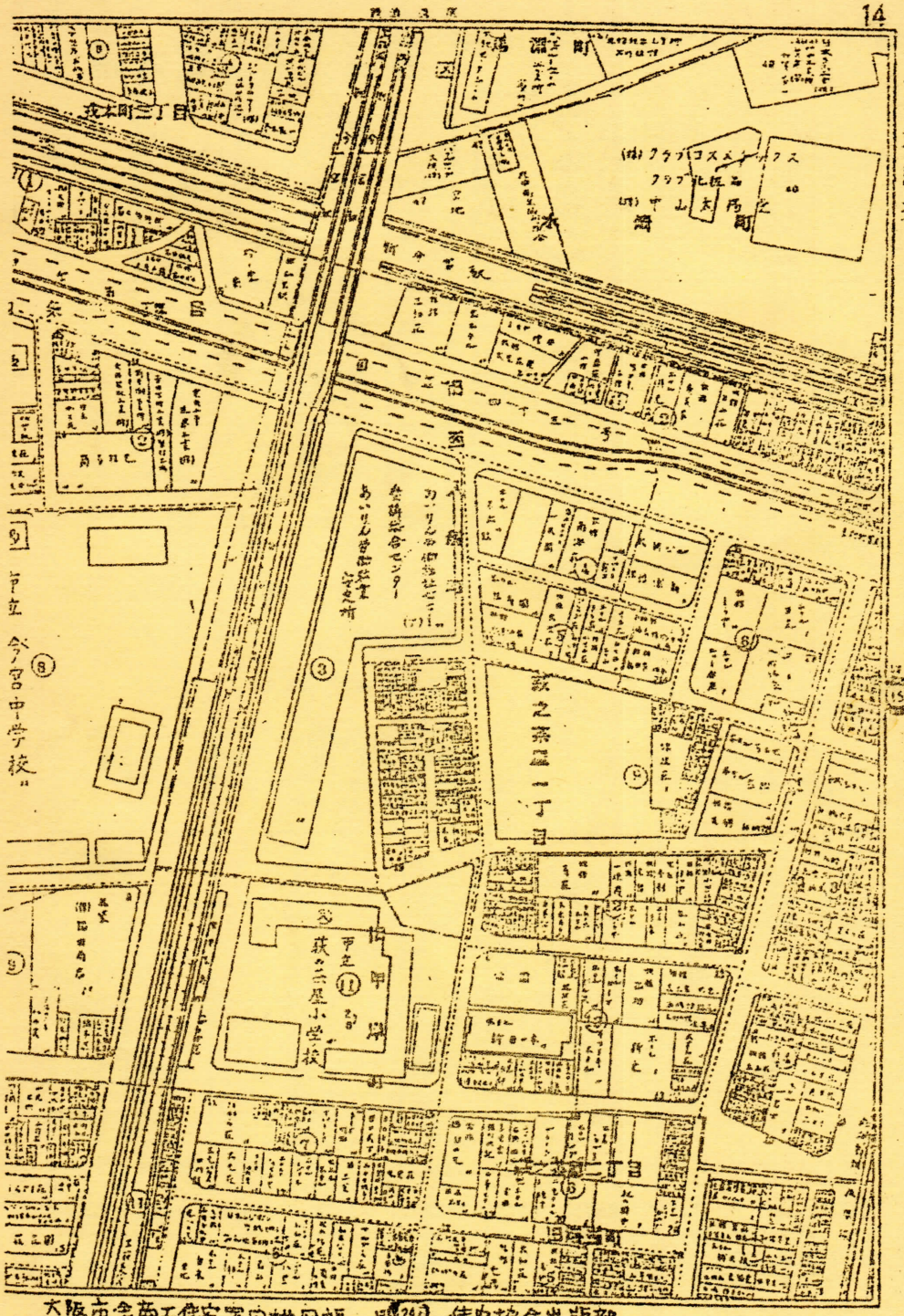
（1945年は11月1日調査で『西成区史』，他は国勢調査による　70年までは東西入船町・海道町・東荻町・甲岸町・今池町・東田町・曳船町を，75年以降荻之茶屋一・二三丁目を含めた）

表Ⅱ 西成区人口推移

	世帯数	世帯人員	男性	女性	合計
1940	49318	4・38			215828
1945					185081 79317
1947					122632
1948					131860
1950	37668	4・02	74278	77231	151509
1955	45266	4・17	93365	95288	188653
1960	57396	3・74	108287	106367	214654
1965	64193	3・31	106430	106380	212819
1970	71793	2・71	100834	93966	194800
1975	67483	2・52	88495	81268	169763
1980	63975	2・36	80068	70752	150820

（1945～48年は『西成区史』人口常住調査よりその他は国勢調査による）

新今宮駅附近



大阪市全面工住宅案内地図帳 (24) 住宅協会出版部
1973年 西成区